

12月13日(金) 講演会「NIE講演会」
講師：三好さん、中島さん

1
様

僕は今日の講演で「地方新聞の在り方」を知りました。
能登半島地震(1999年)の記憶がよみがえり、なぜ能登半島の
犠牲者が出たのかと責任を感じたという話が印象に残りました。
過大な地震を経験した新聞会社として「マスメディア」の抜眼
を叩かれ、正しい情報を被災地が社会全体に伝えることが出来た
ことを「みんなの力」と思っています。これ、今回の出来事から生かせること
が見えたと思っております。より被害を叩き止めるには情報を受け取る
側の意識が大切だと思います。

また、地下鉄サリン事件が起こり、他の新聞会社が神戸から出てい
けなくなった神戸新聞は残ったという話も印象に残りました。なぜなら、当時の
人々には神戸の現状を知ってもらえないと心配と不安になってしまっ
たからです。その報道をする際「被害報道と同様の安心報道」
が大切だということを知りました。後述の「情報」も「内容」の記事を書
くことが大切だと知りました。読者の心を揺るがす手紙も届いたと言っ
て、地方紙と読者の関係性について印象に残りました。
犠牲者の生きた証を残し、それを語り継ぎたいということが大
切だと分かりました。そこから「災害」の対策意識につながること
が大切だと感じました。

さらに、災害が起きたときにどのような時代なのか全体像を
把握することが大切だと分かりました。感染症や体温温症を予防する
に「避難所運営は弱者ファースト」で対策が必要があります。

このようにことから、地方新聞ならではの「地域」の人々との関わりが
あり、それが「災害」時により重要になると分かった中で、そこから「情
報」を語り継ぎたいと思います。



感想文

12月13日(金) 講演会「NIE 講演会」

(震災当時の神戸新聞、震災後の神戸にこゝ)

神戸新聞社 講師：
神戸新聞社 報導

三好 様、中島 様

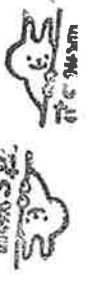
講演の前日と当日の朝のNIEで震災関連の記事を読んでいたことにより、話の内容が頭に入り、とまどやうかたです。また、当時の写真なども多く残っていることに驚きながらも、当時の状況がよく伝わってきて、防災や減災の意識が高まりました。

能登半島地震の揺れは実体験したのが今でも覚えています。しかし震源地から距離があった上であの揺れや恐怖なのに、震源地が直撃した阪神・淡路大震災ではどれだけ怖かったのだろうか、想像するだけでゾッとします。そして能登半島地震のときは時間帯的にもメディアからの情報伝達が速く、冷静に居ることができましたが、29年前と比べるとメディアも限られていると思うので新聞の重要性がとてもしっかりしました。近年は情報伝達が速い分、左イニクス等を見極めることが必要ですが、新聞は正確な情報のみが載っているから信頼も強いのだなと感じました。

「神戸新聞の7日間」というドラマが放送されていたことを初めて知りました。ドラマの冒頭部分だけ見せたいのですが、普通の日常が あんまり一瞬の出来事でいとも容易く壊れてしまうものなのかと再認識してショックを受けました。その大変さを体験してみたいけれど徹夜も思いませんが、今後恐らく自分の生きていく間に起こると言われている南海トラフ巨大地震に向けて日頃から備えておくべきだと思います。

小学校から何回も防災学習や避難訓練、被災者の方々の話を聞かせていただいています。それでも震災の恐怖は消えず、逃げられる自信もほぼ無く、過酷な体験談に心が痛むばかりです。もし今後災害が起きたとしても自分の役割を忘れず誰かのために動き続ける強さは、今の私にはありません。なので震災当時 読者のために新聞を作り続けた記者の方々の強さと覚悟に、深く尊敬しました。それに加え、今回のような講演会で語り継いでいたこと、本当に有り難いと思いました。「備え」に「ゴールはない」という言葉から強い想いが感じられ、今後も備え続けると思います。

「何の覚悟もなしに下準備はなし、正しく怖がり、可成り事を知っている」状態なので、さ、と、自分ができることをできると思います。



12月13日(金) 講演会「 NLE. 阪神・淡路大震災について
講師: 神戸新聞社

」
様

今回の講師の方の講演は阪神・淡路大震災はとても悲しい出来事で、ごんごん
な出来事だ。たいていこれを再認識したい。自分はこのもうすぐ大きな地震を経験し
てないのじ知らずだったから。映像や写真を見て、すごい大きな揺れで人が立
てないような地震だったということを知りました。音声データのおじさんの話してい
内容を聞くと、とても悲しい気持ちになりました。目の前に息子がいるのに、火の
せいでお助けできなくて、せうなりました。もしこのもうすぐ自分が起こってしまったら
自分は何をしたらいいかわからなくなってしまうと思います。このもうすぐことを知ってしま
と、地震がもって怖くなりました。それで、もって地震に備えようという気持ち
が強くなりました。また、資料を見てみると、ボランティアが全国から138万人も集
まったことを知りました。1年前の石川での地震でもボランティアが多かったこと
を知りました。今までの学習でも避難所でも小さい子どもや小学生が避難所
についてのポスターを作ったり、荷物を運ぶのを手伝ったりしていたことは知って
いました。資料やニュースを見てみると、ボランティア活動は誰かを助ける重
な行動なんだなと思います。今までに起こった地震や災害の後の復興は
ボランティアをしてくれている人がいなかったら成り立っていなかったと思います。自分は今
まで、町のボランティア活動や募金活動などでそれほど強い思いはなかったから
と、自分が少しでも行動することによってどこかで困っている人を助けたいことと、今回
の講演で知りました。

今回の講演でよく理解したのは地震のこわさです。ほとんどの教科書まで平和でも
地震が起きればそれは簡単にくだけてしまいます。またそれはいつどこで起こるかわ
かりません。それが一番の地震のこわさだと思っています。阪神・淡路大震災
から30年、東日本大震災から13年、石川での地震から1年がたとうとしています。本当に
いつ起きるのかわからないので、明日からでも防災グッズの確認などで準備をた
くさんするの、自分のできることからコツコツやっていきます。



12/16

12月13日(金) 講演会「NIE講演会」
講師：三好」
様

私は講演会で、震災の恐ろしさを改めて意識した。特に、ラジオの音源と映画の一部をみたとき鳥肌がたっていた。ラジオでは、息子さんを助けたかったのに助けられず、見殺しにしてしまったというのが印象的だった。地震が起きたことで大切な人を失ってしまう悲しさを感じたし、助けられなかった後悔が感じられて、見ていて胸が苦しくなる内容だった。映画の一部では、刻一刻とせまってくる地震に心臓がキュッとなるようだった。地震が起きてからの建物の様子などの写真を見たときも、想像を絶する光景で何とも言えない気持ちになった。その様子を新聞にするためにかけまわす記者側も見ることしかできないくらい気持ちが想像できた。また、震災を経験していない私たちは、次の南海トラフに向けて万全な準備を今からしないといけないと思った。小学生のときから学ぶ機会があり、対策について教えられてきたからこそ行うべきだと考える。私の家では万全な準備ができておらず、家族内での共有もめったにすることがないので、今回の講演会を通して再確認しようと思った。特に、避難経路と災害時の持ち物について確認したい。夏の勧告のときと同じような状態にならないように今から準備することが大事だと思う。今回の講演会で三好さんが言っていたように、若い世代の私たちが大震災の影響を語り継いでいくことが重要だと私も考える。ただ、若い世代だけでなく、経験したことがあるような人たちにも私たちと同じように学ぶ機会があってもいいのではないかと私は考える。

12月13日(金) 講演会「阪神・淡路大震災 震災前夜からの記憶」
講師： 三好 正文・中島

」
様

今回の講演会について、私たちが次の世代に阪神・淡路大震災と語り伝えていかねばならないと考えました。今年1月日に起きた能登半島地震やさまざまな地震が起きている中で、ボウ・ティア文化が衰退してしまっているところなど、阪神・淡路大震災のときと復興期のイロが変化しているのではないかと思います。今ではSNSによるフェイクニュースを拡散できるようなものがあるので、そのほかに理めSOSやご挨拶に助けを必要としている人の助けを妨げてしまう可能性が高いのでSNSの使用のイロを考える必要があらと改めて強く感じました。阪神・淡路大震災は、建物が広範囲で倒壊に及んでしまったり、火事が起きていても道路のひび割れにより、到着が遅れてしまったりなど被害が甚大だったということと私たちが話を聞いて、映像を見たりでしか知ることが出来たりですか。これからおこる南海トラフ地震に向けて、できる対策が家庭ごとにあたり、地域にあたりあると思うのでそのお話をすることも考えておねがいしたいと思います。また神戸ルミナリエはご存知の記憶からきてはいらないようにする取り組みをすることで地震について知ることが出来るのではないかと実感できているのだと感じました。

現在の避難場所では、段ボールハウスなどでプライバシーを守ることができ、感染症も防ぐことができるとも良い取り組みだと思いましたが、また、バリアフリーなど障がい者や高齢者のことを考える仮設住宅も建設されていて今の社会にあたり、防災対策がされているということを知ることができました。

これからは近隣住民のなどの関わりを深めていき何かあったらお互いに助け合えるような関係を築いていかねばならないと思います。

12月13日(金) 講演会「NIE
講師：三吉 人

」様

今回の講演会のテーマはNIEで震災といふことで全
負か忘れてはいけないものを学びました。自分はまだ
1回も地震を体験したことがないから怖さなどが
あまり分かっていません。しかし、震災についてのドラマ
を鑑賞した時に初めて地震は本当に不幸なこ
とといふことを知りました。大きな揺れ水が湖や
Dッカーが倒れてきてガラスは割れるなどの危な
いことばかりで今後一斉起きてほしくないと出
来たらどうすれば不可能といふことを植え付けさせ
てくれました。SNSなどを見ても、あと30年後に
どうなるか地震がくるなどの不安が伝わるとよく
分からない情報ばかりでいつ来てもおかしくない
から家ではしっかりと用品を備えて避難場所
を確信してしまっていると思います。震災でせくな
らした人の分までも自分は1日でも長く生きよう
と思います。また、想像することはいくらでもできる
けれど万一地震が来た時に取るべき行動
を取っていません。しかし、現実では足もなにも動
かないと思わぬので1日1日をしっかりと大切に生きてい
き、目の前から地震はいつ来てもおかしくないと警
戒していただきます。今回はテーマが震災といふ
ことでとても心が重くなってしまったと思います。
心が重くなりながらもしっかりと講演会を真面目
に聞くことができて本当に貴重な時間になりました。

12月13日(金) 講演会「
講師 :

NIE講演会

三好

様

災害が起こった衝撃で津波や火事などの被害に遭い、多くの方が亡くなることは知っています。実際に阪神・淡路大震災やその他の大地震でもそのようなことによってたくさんの方の命が奪われました。今回の授業で新たに「災害関連死」というものを知りました。これは避難所生活の疲労やストレスなどで引き起こされる死のことです。災害時の直接的な被害でなくても人の命がなくなっていることが分かって、震災の恐ろしさを改めて感じました。

また阪神・淡路大震災が起きた直後の、息子さんを亡くした方への実際の取材中の音声をききました。大切な人を亡くしたにも関わらず、話し方が単々としていて軽いような感じだったことがとても印象的です。人は大きなショックを受けると、逆に明るくなってしまったりするということも聞いたことがあります。そのお父さんは人生最後まで息子を置いて逃げたことを悔やみながら過ごしていたと聞きました。このような人への悪影響しか及ばさない震災はあってはならないことですが、止めることはできません。そのため地震前の備えや地震後の対応がとても重要になってきます。地震後にリタズラとして流されるフェイクニュース一つに関しても、1人1人の生死に関わる大きなことです。それで救助が遅れることだってあります。混乱状態にあるからこそ、フェイクニュースにだまされないように、情報を適格に判断できる力を今のうちに身につけてほしいです。

またこのとき一番信頼できるのは新聞です。新聞を作っている方達は、正確な記事を書いてくれます。そして読者をほぐす記事を書くということも重要としていると三好さんはおっしゃっていました。

誤字、脱字があることで誤解を招いたりするため、正確な情報以外は何もせず、撤定していつ何時でも読者のため、社会のために働き続ける新聞社のみなさんがすごいなと思いました。

みました
山崎

12月13日(金) 講演会「
講師:

震災

ハナレ

自由

阪神・淡路大震災と熊鷹半島地震の27話を開き、両方の地震が、
地球に与えた影響と水と乗り越えろか、どのあたりが第1歩か、
かいた？、改めて深く考えさせられた。震災直後の状況や、
その後の復興について直接話を聞くことができたのは非常に貴重な
体験に感じられた。阪神・淡路大震災では、地震による直接的な
死者だけでなく、その後の生活環境の悪化や精神的なストレス
が原因で命を落とす「災害関連死」が多数発生したと新しく
知らされた。震災直後の混乱した状況では、避難場所の不足などが
あり、人々の困難な状況を直面し、その中でも「災害関連死」が
増えたことは、物理的な復興と同じくらい精神的な支えや
地域社会での助け合いが重要であることを示していると考え
された。そのあたりは問題を聞いたりして、災害後の復旧作業では、
人々の心のケアも大切だと感じられた。また、フェイク
ニュースの問題も非常に深刻だと感じられた。日本にはあまり
ない。震災直後、正確な情報を得ることができず、その中で
誤った情報や噂が広まったと聞かされた。フェイクニュースは
起る可怖な不信感、実際の災害時における真実を伝えることの
重要性を感じた。信頼できる情報源からの
迅速な報道が被害者を支えるために「大切」と重要だと感じ、改めて
痛感された。災害後の復興には時間がかかる、さまざまな
課題があると感じた。今日の話を聞いて「災害関連死を減
らすフェイクニュースの拡散を防ぐために一人一人ができる
ことを考え、地域社会として支え合うことの大切さや、重要性を
改めて感じることができた。

12月1日(金) 講演会「地震について」
講師：三好さん

」様

私は地震は実際に経験したことがないので今までいっかお二る
という自分事には考えられなかったが、今回の講演で地震のおそ
ろさは理解できた。

地震のおそろしさは地震は前よりいっかお二る地震からわか
り分かったが、近年の破壊はとてつもなく、地震後の国民の自身
の破壊や人命を奪われることになり、救えられない程の負の連鎖
がお二ると思われている。

そして、地震から守るためには必要なのは危険感であると思
い地震のおそろさから分かっていっかお二る理解しておくこと

たんすは避難に固定したり防災グッズを購入したり、家族との避難
場所を決めたり、地震がお二る前に少しでも自分や大切な人
のために行動しておくことが出来る。地震後のことを地震がお二る前
に考えお二ることはとても大切だと思われている。

そして、個々の地震への対策もとても大切だが、
行政全体の地震対策も大切だと思われている。

この対策として、対策に合わせた家を建てたり、太陽光や発電
できる家を建てたり、避難場所を増やしたり、防災グッズの物資
をためておいたりなど様々なことがある。

このように今回の講演で地震の恐ろしさや学ぶことが
できた。地震は私が住んでいる間に一度は必ずお二るであろう
運命であるのかもしれない。その時にいっかお二る行動をしてお二
る、地震後では落ちた時に行動をしようと思われている。



12月13日(金) 講演会「
講師 :

駿

」
様

2024年1月1日石川県で能登半島地震が起りました。当時、祖父母の家であせちを食っていた僕たちは、まさ始めにここまで災害が来なくて良かった。と少し他人事のように感じていました。ネットを開いても災害のことはわかりがくしづつ自分が経験したかのように情景が浮かんできました。僕は、大きな規模の地震を経験したことはありません。祖母に震災の様子を聞いたリして、新聞の配達が速かったと言っていました。今日講演会を聞いて、頭の中でより想像することができました。祖母は災害で曾祖母を亡くしましたが、学校でのボランティア活動で役割を持っていたため、泣きながらその役割を果たしたそうです。それは新聞記者でも同じことが言えると思います。社員一人一人に家族がいて、守るべきものがあって、憩いの場、ふれ合いの場となる家があったはむなの、一刻も早く会社に行き、悲し暇もなく神戸民のために行動するということが尊敬ではないです。僕と社員を置き換えに時、仕事に行けずただ泣き痛れると思います。やっぱり経験していないので想像はできても完璧に理解することはできないので、最大限まで寄り添って今僕たちに何ができるかを考えました。体力のある僕たち高校生が率先して避難経路を歩き、確認し、家族と共有するこや、枕元にスリッパと懐中電灯を設置し非常用食の準備、笛やヘルメットといった日常的に使わないようなものでも常備しておくことなどがあげられます。南海トラフ地震は、そう遠くないので先送りにすることなくいつ起っても対応できるようにしたいです。講演会を終えてからは、他人事が自分の事であるかのように考えることができるようになったと思います。これからは、何事にも今しかなくていい、明日すればいい、という考え方を捨て、今を悔いのないよう全力で生活していきたいです。

12月13日(金) 講演会「
講師 :

」
様

今回の講演を聞いて、改めて地震は恐ろしいものだ”と思いました。私は小学生のとき、「どうしてこんなにも防災や地震のことに関する授業をするんだらう」「なんで避難訓練なんかしなさいといけないうんだらう」とず”と考えていました。でも今の私からしたら「何でこんなことを考えていたんだらう、私」と思います。私が今住んでいる神戸には悲慘な過去が”あ”て、そのようなことが”あ”っても少しでも逃げ遅れないように、命を失われないためにしていることなのにと当時の私に言っ”てあげ”たいです。今回見た「神戸新聞の7日間」という作品は、中学校のときにも見たことがありました。今日も見て、大地震が起”こったとき、やはり焦り、不安、驚きで何もできな”いし、何よりも怖”さでたまらな”いのだ”らうと感じました。適切な行動が”取れな”かったりして、一つの命を失”ってしま”たりしたので”はな”いかと考えました。一番大切な家族、友達を失う悲”しさ、悔”しさは言”つり知れな”いものだ”と思います。現代では南海トラフ巨大地震が”とても高い確率で近”々くると言わ”れています。考えるた”けで”怖”くて怖”くてたまりません。予言な”どもたくさん出”ていてさらに怖”いと感じてい”ます。今まで敬”わ”ってきた様”々なことを冷静にな”って行動”できるのかと考えると”は”かりです。一番怖”い、嫌”なことは家族や友達な”どの大切な人を失”うので”はな”いかというこ”とです。また”そのよ”うなことを経験”していないため、余計に不安”です。また、防災リ”ュックも万全な準備”が”できておら”ず、避難所生活にな”たら生”きていけるのかな”ど不安”で”い、は”い”です。他にも数えきれな”いくらい不安”なこ”とはたくさんあるけど”絶対に生きる希望”を捨”てず”に、今”から”できるこ”とを”実行”し、家族、友達には日頃の感謝”を伝”えてい”きたい”です。



12月13日(金) 講演会「震災」
講師：みよし



阪神淡路大震災について、小学生のころから何度も学習して来たけれど、最近になってやっと、未来に語り繋いで、いざというときに行動するのは自分にあたると自覚した。今回のお話を聞いて改めて、震災はとても怖く、命が直接関わることだと理解した。現在の震災時の状況は、ボランティアの衰退や二次被害の予防から支援が遅れていることが分かった。また火災があったときが来ればどの地震の被害で消防車が現場まで到着するのに時間がかかることを知った。震災があったときは、日本全国が協力して消防車や救急車が被災地に向かっているイメージがあったので、簡単に支援ができるというわけがないと分かった。しかし、協力し合うことは復興に対する一番良い支援だと考える。神戸新聞と京都新聞の災害協定は防災でもあり、被災したときに一番の情報源にほなる新聞が守られていると知り安心した。復興に大切な協力の中に新聞社の思いやりが入っていると考えた。それは、お話で聞いた。復興まちづくりと市民の考えが合っているかを現場に何度も訪ねて確認してから記事にするということだ。経験してなくても想像をして考えることのできる被災中の感情によりそっていることが市民としてとても心強いことだと思った。「備え」にゴールはないという言葉のとおり、自分にできる全ての備えを日頃からしていきなさい。またその「備え」が役に立ってしまうときが来たら協力して、積極的に関わって役に立ちたい。



12月13日(金) 講演会「 NIE講演会
講師： 三好 正文

「
様

私は今日の講演を聞いて、災害というものは若い人に語り継いでいくことが最も重要なのだと分かりました。三好さんは神戸新聞の記者として、阪神淡路大震災に実際に立ち寄り、ため、実体験から様々な知識を得ることができました。まず、新聞記者のかけには、読者に役立つ情報を一面に書き、安全安心な情報を届けようとしており、その姿勢を感じることができました。災害が実際に起きると、とても不安になり焦る人々が多くいる中で、正確な情報が身に入ると、安心したりする人もいたと思います。また、現代人はインターネットの普及により、SNSなどから情報を得ることが多くなっていくが、SNSにはデマやフェイクニュースも含まれているため、取捨選択することが難しいと感じました。だからこそ、新聞を読むということは正しい情報をそのまま取り入れることができるので、これから心がけて読んでいきたいです。また、三好さんの阪神淡路大震災の経験を聞いて、震災というものはとても恐ろしいものだとも感じました。家具の下敷きになってしまったり、逃げ遅れはど心が痛くなりました。また、南海トラフがくると予想されているため、普段の生活から防災に対する意識を高めおく必要があると思います。そのために、災害を実際に体験した人から話を聞くことはとても大切だと分かりました。自分から積極的に、あの時何があってどう行動したのか知ることで、次は自分たちの役に立つかもしれないし、それを次世代にまで受け継いでいくことに意味があると思います。災害文化というものも身近に存在しているのだと知り、ため、今より地域の方と関わり、文化を受け継ごうと思ったり、一つ一つの災害から学ぶ姿勢が今後必要になってくると思います。このことから私は今後、防災により興味や関心に向け、災害というものの怖さや災害文化などを受け継いでいきたいです。

最近の一番身近な地震は、能登半島地震でニュースで被害の大きさは
ほとんど知っていたけれど、実際に経験された方としか分からない怖さや大変
さがある改めて考えさせられた。地震の怖いところは、常に命の危険にさらさ
れるところだと思った。たとえ避難所に避難できても、そこで風邪や感染症
にかかり命を落とされた方が、阪神淡路の地震では900人以上いると初め
知った。避難所にいたら安心ではなく、自分の命は自分で守らなければなら
ないこの大切さを感じた。また、普段から避難訓練などをしていても、実
際に地震が起きたとき、その通りに動けるか自信が無いところも、
地震の怖いところだと思う。スマホやSNS、各種メディアが普及している今、
災害が起きたも、離れている家族にも連絡がしやすかったり、今の状況
を調べられる点では以前よりも一歩も行動しやすくなった。しかし、その反面、
スマホやTVニュースが飛来しやすくなるリスクもある。普段は、事案が
どうも見極めることができても、非日常に焦っているときに正常な判断が
できるとは限らない。人の不安に思いつきを利用する人もいるんだというこ
を知っているだけでも、TVニュースを信じる前に踏みとまれると思う。
焦りや不安の中で新聞が一番信頼できる存在であるべきだと今日の公演
を聞いて感じた。読者に役立つ情報、安心安全情報を新聞という形で
届け、犠牲者の生きた証を目に見える形で残し、次の世代へとつなぐべき
役割があると思う。震災の当事者にしか分からないことがたくさん
あるだろうし、むしろその方が多いと思う。だからその地震を知らない世代
へ伝えられることは全て伝えるべきだし、震災の怖さを知り、かき分け
る。新聞は、当事者と次の世代をつなぐ一つの架け橋のよう
な存在なのでないかと思う。

12月13日(金) 講演会「1.17つなぐプロジェクト
講師 :

三好 中島様

1.17つなぐプロジェクトの講演会を聞いて自分はこれからこの歴史を忘れないように記憶に留めておくのが大切だと感じた。

阪神・淡路大震災の影響をとっても大きく受けた神戸でもあの地震から30年を向かえる今、生まれていながら、人が増えているなかで、とんど人震災の恐ろしさを知る人が減ってきているからこそ僕達の見せていた「神戸新聞の七日間」という映画、ほとども良い震災について勉強にもなるし、これから^の教訓にもなり、当時の人か、とんどな生活を暮らしていたのか、とんど阪神・淡路大震災の大部分を知ることのできるの、この映画で語り継ぐことかできてとても良いと思つた。そして僕達が聞かされていた、実際の震災の時のラジオ音声では倒壊しただけでなく火事も起っていたために救える命が救えないという状況だったということを知つた。

1.17つなぐプロジェクトで主にしている実際に経験した人へのインタビューや地震が発生した日の朝夕刊が見られるなど、子ども向けの活動も行われているからこの活動をもっと大切にして、1.17は良いものになっていくのではないかと思ひました。そして三好さんは高齢者から7/17つなぐを引継ぎ、若者世代か、とんど若い人に受け継ぐという良い循環か、できて1.17は良いと仰つていて、それを僕達に伝えるため、この講演を開き話してくれたのが、日なにかと思ひました。実際に震災を経験した人はとても地震に強い教や対策、対応などしているのを改めて知る「か、できて、そのくらい強い地震への怖恐をもと持っておくのは、1.17はないのか、と思ひました。地震は、人が少くなるようなことか、あつては、1.17は、少く、少くならないように耐震、防災グッズなど、過去の経験から備へておく必要が、前人以上にあると思ひました。この講演を聞いて、地震への警戒が、強まったので良かったです。



12月13日(金) 講演会「NIE」
講師：三好さん なかじまさん

」
様

〈能登半島地震・阪神・淡路大震災〉

災害との関わりが深いこの神戸では、阪神・淡路大震災による大勢の人々がせなり、傷つき、悲しみました。初めての大震災で自分の身も危ない中、状況を理解したり、安心、安全に思える良い情報を一早く皆に伝える姿が凄いなと思いました。僕達は災害に遭ったこともないし、実際にみたこともありません。なので、震災当時の人々の気持ちを理解することは難しいですが、その大変さ、災害に対する悔しさ憎しみを知ることができます。自分達の周りには大切な人がたくさんいる中で、その大切な人達が一瞬で奪われ、自分の家も物も全て理夫尽に奪われる。感情をぶつけることも、初めて感じる感情を受け止めることも難しいです。様々な話を聞く中で、災害の話をする人達は皆、悲しい顔をします。相手は自然で測り知れないほどの危険性を持ち、やが来たからと言って、やり返すこともできない、もちろん自然には罰もありません、感情もあります。人々が願った思い通りにあやったり、動いたりしてくる訳でもありません。どれだけ震災の対策をしても、その予想の範囲におさまるとも限りません。いつ起きるのか、どのぐらいの強さなのかを事前に知ることもできない、強いか弱く備えよう、弱いか丈夫という簡単な話ではありません。備えあれば憂いなしという言葉がある通り、備えていなくて損することはあっても、備えていて損することはありません。いつ起こってもおかしくない地震、その脅威から身を守る為にも、防災についての知識、備えといった自分でできることは当たり前とし、自分の命を最優先とし、それプラス自分の家族、友達といった大切な人を守り、周りの人達を助け、みんなが助けあひながら、災害を皆で乗り切り、新しい世代の子ども達へと伝えていきたいと思いました。



今日のお話を聞いて今までよく耳にしてきた阪神淡路大震災の話ですが、今日では神戸新聞でこのお話を起こしたのが神戸新聞だったので、向えてきたのが震災から得た教訓、教訓からこのように対策はよいのか、災害報道の責任なども知る事ができました。神戸新聞で震災から家が割れたロッカーが飛んで入り込んで部屋がぐちゃぐちゃになり全壊となり移動せざるを得なかったと聞き、今の神戸の街などでも起る事でもし起るとしたら前より対策して安全だと思いたいというより注意しておく必要があるのだと思いました。神戸新聞が震災時に人々が不安にならないように死者数や被害の割合だけでなく生活、復旧の備えも生活術などを紹介したり震災後に起こる被害などそのこと被害を受けた方少しでも希望を与えられるようにしていたのを知り、神戸新聞の自身にとりて辛い状況だったはずなのに小さな幸せを自分に向けられるように頑張る支えになっていたことがとても嬉しいと思いました。また震災から教訓が厳しいという点、感染症はやはり、高層ビルが倒れる、火事でも消防車は来ない、人間は72時間以内には生存の必要とら、教訓があり、もし対策はするものか、三密をさけたり、段ボールハウスができて、保温とか加湿が大切という事を学び、大きな震災は私たちに大きな被害を与える波紋が99%の確率が今後起こる南海トラフ地震にたいに役立つのだと思います。その他に災害でテレビなどは現場をしっかりと伝えている新聞では特に誤字脱字に気をつけていたと言っていて、その中で緊迫した中での大変な事などをもっと感じることができました。

最後に聞いた私たちが今回教わったことを理解しながら次の世代に伝えることが大切だということから自分たちの子どもやその先まで伝える、震災を知らずの人にも危険性を知らせる、準備し安全を守るようにしたいと思いました。

月 日() 講演会「 NIE 講演会
講師： 三好 正文

」
様

阪神淡路大震災が発生した当時も神戸の人々のためにいち早く情報を届ける新聞をつくらせていたことに驚きました。被災地の状況を伝える記事では誤字が無いように注意し、被災者の人に正しい情報を届ける役割以外にも、被災者の心に寄り添った元気が湧くような記事など、新聞がもつ役割はとて大きいものだと感じました。

新聞などの震災の現状を直接体験した方々の体験とそのまわりの状態で残すものは、後の世代などに「語り継ぐ」という役割が重要になると思いました。また、被災地を他の地域と結びつけ、支援の広がりにもなると思いました。新聞などのマスメディアが災害の教訓や知識を記事にすることは、他の地域で災害が起きたときも同じような災害が発生したときに被害の数を減らす、未来の町づくりに役立ちと感じました。

震災の記憶を次の世代につなげるためにも、震災学習を町で行って来たように若い世代の私たちがつないでいっていかねばならない社会にとって一番大切なことだと思いました。多くのメディアで「阪神大震災」と呼ばれている中、神戸新聞では「阪神・淡路大震災」と呼びつづけるように、震災の記憶を風化させないことが大切だと思いました。私たちが直接体験してはなくても、見て、聞いて、学んだことを被災地である神戸から発信しつづけていきたいと思いました。今までの教訓をモトに、住みつづけられる町づくりに 献てできるような大人になりたいと思います。



12月13日(金) 講演会「 NFE講演会
講師： 三好 様

様

今回のNFE講演会を通して、新聞と地震のつらかりについて学ばせて
 くれたことに改めて感謝の意を表します。2024年1月1日に発生した能登半島地
 震と1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災との共通点か
 と2019年の記事を読んで感じたこと、つまり、どちらの地震も97%の
 死者が1人暮らしの犠牲者を出し、地球社会に深刻な影響を与えて
 いることに改めて思いをめぐらします。阪神・淡路大震災では、(自殺者を含む)
 6434人もの死者が出た。神戸市や周辺の地域で「大きな被害
 を受けた」と知り、また、地震が発生し、学校やビル、高速道路などが崩
 壊して三宮周辺のサンプラザが大きな被害があったことにも気づかされた。
 実際に経験したことがないけれど、家から出ることができず、工場の設備が壊
 れた背景に考えさせられた。また、阪神・淡路大震災の際には新聞が重
 要な役割を果たした。このようにも印象に残っている。情報提供や救
 援活動への呼びかけや被害者の声を届けることで、支援の幅を広げること
 が目的であり、支援物資や援助金などが全国から集まれば地域の
 復興に貢献したことが、他の地域のために助け合いというのには「ありがとう」
 などの震災の影響を受けた神戸では、レズリエルが開催されたように
 して、レズリエルの光に犠牲者を悼むとともに、暗い過去を乗り越えよう
 とする人々の姿を尊敬していると知り、震災を乗り越えるための手段が
 あり、毎年お盆の復興光景も訪ねてほしい。私も神戸市民として、レズリエル
 に今年も行ってみたいと思っています。今回のNFEの講演会を聞いて、私も
 能登半島地震も、阪神・淡路大震災も、私たちに「過去の教訓と学
 びを与えてくれた」と過去の震災から防災対策を行う。そして、新聞を通じ
 て「情報発信が、私たちにそのもっと先の次世代に知らせてもらう、忘れ
 ないという思いを強く、復興に役立てたい」と改めて感じさせられました。

